天地　ネットワークテーブル　556号

天地シニアネットワーク　2024．6．19

TENTI TODAY ＜「円」の行方＞＜小鹿田焼（おんだやき）＞			1
会員の広場			3
随　筆	大本営発表	宮川典子	3
歴　史	伊藤博文という政治家ー その1—	臺　一郎	4
歴　史	「了解日本（日本を知る）」（22）10，外来文明の三部作「日本人は中国文明を受け入れる」	兪彭年	7
歴　史	アメリカ人による日本昭和史（1）	津田孚人	9
講演会	「新三木会」		12
事務局			12

****

TENTI　TODAY

****

先日開いた大学時代のゼミの会、15人のメンバーのうち、7名が出席、2名が欠席でしたので、今なお6割が元気でした。酒量は落ちましたが、口は相変わらず達者、学生時代が再現し、ひとときですが若返りました。

****

”健康の秘訣は？”と訊かれますが、”食事”と、”薬をのみ間違えないこと”、と思っています。食事を3食しっかり食べること、食用油は”アルガンオイル”に徹底しています。アルガンオイルは、抗酸化力がオリーブオイルより数段優れ、最高の油です。薬は、種類が増えましたので特に気を付けています。

****

如何ともしがたいのが”視力”。最近は、道ですれ違った人の顔が判別不能になりました。眼科医からは、”高齢で持病がある、だから手術など無理をするな”の一点張りで放置されています。蹴躓かないように、ぶつからないように、と細心の注意が欠かせなくなりました。新聞は良しとしても、文庫本など字が小さいものはアウト。この頃は　”見えないものは見ない”と割り切ることにしています。

****

新聞記事では、「円」関連のニュースに注目しています。最近「日銀は、国債の買い入れ額を減らし、金利の上昇を容認する」と報道されている。本来であれば、金利の上昇は「円高」に向かうはずですが，逆にジリジリと下げています。

　年初は、アメリカの景気がダウンし、米金利が下がる、と見込まれていました。その結果、日米の金利差が縮小し、「円」が相対的に高くなると予想されていました。しかしアメリカの好景気は続く、と見通しが変わり、米金利は下がらなくなりました。アメリカの好景気は、民間における生成 AI関連の好調と、さらにはウクライナ、ガザ地区、二つの紛争が止みそうになく、「戦争による好景気」がアメリカ経済に付加されている

ようにみえます。
＜アメリカの好景気は続き、金利は下がらない＞＜日銀は国債の買い入れを減らして、金利を上げる＞＜金利の上昇を政府は好まない＞
日銀は身動きがとれず、植田総裁の苦悩がよく分かります。
****
ＮＨＫ、日曜８時からの「鶴瓶に乾杯」の番組で、２週にわたり大分県日田市が登場し、その中で「小鹿田焼（おんだやき）」が紹介されていました。秀吉による文禄・慶長の役で、多数の朝鮮人が日本に連行されました。そのうちの一人の陶工によって、「小鹿田焼」が生まれたそうです。当時の様子を辿ってみました。

朝鮮で戦った日本の武将たちは、多くの朝鮮人を朝鮮から日本へ連行しました。黒田長政は、連行された人たちを福岡城下の大濠（大濠公園）に集団で収容し、厳しく監視しました。「唐人町」の始まりでした。同じように、佐賀、熊本、鹿児島、小倉、広島、岡山、高知、徳島の城下にも「唐人町」がありました。
連行されたのは学者、医者のほか、陶工、大工、石工、紙漉工、活版工、百姓とあらゆる職業の人たちが含まれていた。これらの人たちの生還について、徳川幕府と朝鮮王朝はほぼ合意していたが、各藩主はひたかくしにして帰そうとしなかった。
福岡城下には村をなすほどの多くの人たちが残っていた。陶工、石工、紙漉工、など特殊技能を持つものは、特に藩の産業開発に役立てるために帰されなかった。
八山、と呼ばれる陶工もその一人で、福岡県直方の鷹取山で焼きものを焼いた（高取焼）。身分は士分（陶工は朝鮮では奴婢）扱いとなり、生活も保障されたが、しかし望郷の念は強く、藩主に申し出るが拒否され、嘉穂郡山田へ移された。異境で生涯を閉じた八山、八山は彼の号で、姓名や生まれ故郷もわからない。しかし、陶技は一人息子に受け継がれ、それが今日に伝わる「小石原焼」「小鹿田焼」なのである。
朝鮮陶工による焼き物は、その美しさだけにとどまらなかった。名もない彼らのもたらした「蹴ロクロ」と、「蛇窯（ジャガマ）」と呼ばれる登り窯によって、焼き物の大量生産が可能になり、日本人の生活容器までも一変させた。
「蹴ロクロ」は、在来の手まわしに比べて大型の器を一気に引くことが出来るだけでなく量産ができる。また、在来の穴窯と構造を異にする「蛇窯」は、床面だけが熱を吸うので在来に比べ僅かの薪ですみ、一度に焼く量にも格段の差がある。１７世紀の前半だけで北九州地方だけでも１００をこえる窯が出現した。
朝鮮陶工の手ではじまる新たな焼き物の代表格としては、「高取焼」「小石原焼」「小鹿田焼」のほか、「上野（あがの）焼」「唐津焼」「八代焼」「薩摩焼」「萩焼」などがある。
大阪夏の陣の翌年１６１６年、陶祖と言われた「李参平」が日本で初めて磁器を焼いた。磁器をつくるには白磁鉱という特殊な原料を見つけ出さねばならず、また焼き上げる技術も陶器より、はるかに難しい。
鍋島藩はさっそくそれに目をつけ、藩内に散在していた朝鮮人陶工を有田に集めた。宋伝夫人（百婆仙）の率いる数百人の陶工も黒牟田から有田稗古場に移され、平戸にいた陶工たちは有田黒牟田山、山溝山に移された。こうして有田には１０年足らずでのうちに４０にのぼる磁器窯が築かれ、朝鮮風の磁器（初期伊万里焼）が大量に生産され出した。そしてまもなく有田は、日本の磁器のメッカとなり、日本各地はもちろん、ヨーロッパにまでその名が知られるようになった。莫大な収入を得るのが可能となった鍋島藩は、「秘法」が他藩に漏れぬよう日本人の有田への出入りを厳

重に取り締まり、磁器の販売を３里も離れた伊万里港に限定した。

以上、「江戸時代の朝鮮通信使」（李進？著・青丘文化社出版）より

****

会員の広場

****

「大本営発表」　宮川典子（９４歳）

昨年（２０２２年）１２月１７日、ＮＨＫのＢＳで「軍人スポークスマンの戦争―大本営発表の事実」が放映された。暮れの雑多な番組の中、見応えがあった。大本営は日中戦争時に設定されたが、私が覚えているのは太平洋戦争以後である。

１９４１年１２月８日朝、「日本陸海軍が今暁ハワイの真珠湾に突入、大勝利を得た」との吉報がラジオで発表された。軍艦マーチの勇ましい曲を奏でながら、感動的な大本営発表であった。女学校一年生だった私は「日本は何て強いのだろう」と胸をわくわくさせて登校した。級友たちも大騒ぎであった。

テレビのないその頃は、時々親に連れられて映画館に行った。戦争を鼓舞するような家庭劇を見るが、必ずニュース映画が一緒で、戦場の勝利の場面のみを見せられていた。日本人が厭戦気分を持たないように、同じく新聞も戦争に不利なことは何も載っていなかった。

戦争が深まるにつれ、主食の米も衣類も切符制となった。姉と二人で自分たちや弟妹の靴下の破れを繕ったことを思い出す。電燈には防火用のカバーを掛けた薄暗い夜であった。

私たちは天皇を神と仰ぎ、日本が中国や東南アジアと共に栄えようという世界を目指したのだった。けれども３年８ヶ月のアメリカとの戦いで次のような経験があった。

１９４２年のミッドウェー、翌年のガダルカナルでは烈しい戦争が行われ、日本は苦戦したが、大本営は「転進」と日本国民に告げた。

何故真実を発表できなかったのか。当時のアナウンサー役の平出大佐はこの矛盾に悩まなかったのだろうか。今も耳に残るあの雄々しい声の中で彼の心はどんなだったろうか。当時は一番大切なことが疎かにされていたのである。政治家も、陸軍も、海軍も、国の方針が一致していなかった。それなのに、東條英機首相が最後に命令すればその通りになってしまう。縄張り争いでなく、よく話しあって最善を尽くすべきだったと思う。

次いでテレビでは二人目のナレーター広石中佐の遺族が出席、広石が内密に実際の戦況を記したノートを防衛省に寄贈している。

戦争は誰も幸せにしてくれない。今のウクライナの人々の苦労を見ると、自分の女学生時代を思い出す。勉強は三年生までで、四年から兵器生産の工場で働いた。

いよいよアメリカ軍の本土空襲が始まってからは、各家庭の防空壕を利用することも多くなった。そして遂に３月９日の東京下町大空襲となり、一晩で１０万人の焼死者が出た。私の家も焼けたが、家族８人が無事であったことを何よりと思うばかりだった。

戦況を一言も批判できなかった時代から、何でも自由に意見を言える現在に、民主的な明るい世の中にと、切に願っている。

（２０２３年１月）

****

伊藤博文という政治家－その１－　　**臺　一郎　（７５歳）**

伊藤博文は 19 世紀日本国の発展と近代化に多大な貢献をした政治家であり、明治を代表する元老である。その肖像が昭和 38 年から昭和 61 年まで 22 年間も千円札の図柄として利用されたため、没年から 110 年以上を経た現在でも多くの日本人がその顔と名前を知っている。

生年と没年、両親

伊藤博文が生まれたのは天保 12 年（1841 年）の 9 月 2 日。没年は明治 42 年（1909 年）の 10 月 26 日で、ロシア高官との会談のために向かった満州ハルピンの駅頭で朝鮮人テロリストの凶弾に倒れて亡くなった。享年 68 歳であった。

伊藤が生まれた天保という時代は 1830 年から 1844 年までの 15 年間である。薩摩や長州など西国の雄藩において、幕末から維新に活躍した志士達の多くが生まれた時代でもある。すなわち、木戸孝允、江藤新平、坂本龍馬、山縣有朋、大山巌、井上馨、大隈重信、黒田清隆、高杉晋作そして伊藤博文等である。

また博文が生まれた前年の 1840 年には、清国と英国との間でアヘン戦争が勃発した。大敗した清国は香港の割譲や新たな開港地の提供など不本意で不平等な講和条件の受け入れを強要された。英国を初めとする欧米列強国は強力な軍事力を背景に、アジアやアフリカや中東の新興国に対して、不公平な商取引の強要や植民地の獲得を拡大するなど、まさに帝国主義の時代であった。

伊藤博文の生誕地は長州周防国熊毛郡束荷村（現在の山口県光市）である。農民であった父林十蔵と母琴の一人っ子として生まれた。博文が５歳の時、十蔵は破産したために妻と博文を妻の実家に預けて萩にゆき、博文が８歳の時、母子は萩の十蔵の元へと引き取られた。その後 1854 年、博文が 13 歳の頃、十蔵は、高齢で跡取りの居ない伊藤直右衛門の養子となり、農民から下級武士へと身分が上がった。必然的に博文も農民の子から長州藩の下級武士の子へと身分が変わった。

学歴

さて今でいう学歴はどうだったのだろう。博文の幼年時は周防国束荷村で手習い

塾のようなところに通い文字を習ったようだ。萩に移ってからは藩士の子弟が大勢通う久保塾に入り、読書・詩文・習字等を学んだという。そして安政三年 14 歳となった博文は下級藩士として初めての役務で相模国鎌倉に行き、藩の上士来原良蔵の手付け（付き人）として短期の警備業務に従事した。来原に気に入られた伊藤は、鎌倉での役目を終えて萩に戻ってから来原の紹介で吉田松陰の松下村塾に入門した。

松下村塾では高杉晋作と出会い、また塾長の吉田松陰にも可愛がられ、藩が若手藩士の時勢認識のために行なった京都派遣にも松陰の推薦で参加した。京都では同じ長州藩士の山縣有朋と出会い、以来 50 年以上の交友となった。松下村塾では日本や中国、西洋の軍事戦術、哲学、歴史、農業、社会貢献など多様な学問を学んだ。学歴としては、この他に文久３年９月から6ヶ月間を過ごしたロンドンの大学での留学経験もあるが、伊藤の一般的な学歴としては松下村塾出身とされる。

性格や人物像

博文の人柄・性格・人物像について述べる。幼少時の伊藤は大変な負けず嫌いだったという。長じてからの伊藤は開けっぴろげで朗らかな人柄であり、時代や社会が変われば政治的立場も変えるという柔軟性を持つようになった。また失敗を恐れぬ楽天主義者で、自分の行動選択や判断はいつも成功すると確信するタイプであった。出世して高い地位についても、お金にはきれいで執着がなく、それ故に上司となった木戸孝允や明治天皇の信頼を得た。

欠点ということにはならないが、ともかく無類の女好きで、付き合っている女の数が掃いて捨てるほどいるという理由から、友人達は伊藤のことをしばしば「ほうき」の仇名で呼んだ。伊藤の女好きには天皇も呆れて「ほどほどにせよ」とたしなめたと言われる。

1863 年に英国留学をした際、ロンドンで知り合った英国外務省の職員で後に在日英国公使館の書記官となったミッドフォードは、回想録で伊藤のことを次のように紹介している。「彼は精悍で野趣に富んでおり、まさに隼のような若者だった。冒険好きで無類に陽気で、それでいてイザ仕事となれば、驚くべき正確さと機敏さを発揮した」と。

また小説家の司馬遼太郎は、明治 6 年に欧米視察から帰国した伊藤が殆んど一人で大久保、岩倉、三条らのキーパーソンの間を奔走し、面談し、説得し、実施に向けてほぼ既成事実化していた征韓論をチャブダイ返し的に葬り去った行動力、政治力に驚嘆している。

明治 28 年（1896 年）伊藤は神奈川県大磯町に別邸を建設した。大磯を気に入った伊藤は翌年本籍も大磯に移した。伊藤が大磯で暮らすようになると、有力な政治家や官僚が大磯詣でをするようになり、また山縣有朋、陸奥宗光、西園寺公望など少なからぬ政治家が別邸を大磯に持った。このため、さながら立憲政治の舞台のようになった。

伊藤は屋敷の周辺をよく散歩したが、警護も伴わず単身普段着姿で歩き回り、地元の農民に作物の値を尋ね、或いは畦に腰掛けて老人に話しかけるなど、気さくな人間としての一面を見せた。

英語でのコミュニケーション力

人間伊藤を語る上で、その優れた英語力やコミュニケーション力は外せない。

伊藤が英語を初めて本格的に学んだのは文久３年（1863 年）で、９月に藩の若手５人と英国ロンドンに留学をした時だ。ユニバーサルシティカレッジという大学に入学して主に理数系の科目を学んだようだ。昼は授業で、夜は下宿で、週末は博物館・美術館巡りや海軍施設を見学するなど、まさに英語漬けの日々だったという。

６ヶ月後の文久４年３月、現地の新聞に、祖国日本では長州藩と英仏蘭米など欧米４カ国の関係が悪化して武力衝突の危険性が高まったことを知った伊藤と井上は、留学を切り上げて急遽帰国の途についた。

ロンドンでの６ヶ月の留学生活で、伊藤は日常生活に必要な英会話を話せるようになっていた。英会話の習得スピードは人によってかなり異なる。伊藤は平均的な日本人と比べると、そのスピードが相当に早かったようだ。また帰国後も英語の勉学を欠かさず、新政府成立後は公務による海外出張も何回も行っているので、会話力、作文力ともに年を追って上達したようだ。また維新政府の幹部となって東京暮らしとなってからは、開店間もない丸善書店から英語の書物を買い上げ、良く読んでいたという。

さて、３月に留学先の英国を離れ、６月に横浜に上陸した伊藤と井上は、直ちに英国公使館を訪れて公使のオールコックや通訳のアーネストサトウらと面会し、「自分達二名がなんとしてでも藩を説得するから」と長州との武力衝突の中止を要請したが、結局願いは叶わず戦争（下関戦争）となった。戦争は、長州藩の沿岸砲台と英仏蘭米４カ国連合艦隊(17 隻)との砲撃戦となり、長州藩側は沿岸部の砲台をほぼ壊滅されて敗北した。

終戦後の講和交渉で、伊藤は長州藩側の全権高杉晋作の通訳を務めた。たかだか６ヶ月間程度英国に留学しただけの人間を講和交渉の全権の通訳として使わざるを得ないところに長州藩側の人材不足が見てとれる。また、己の英語レベルを恐れず通訳を引き受けた伊藤の度胸と厚かましさにも笑いを禁じ得ない。

伊藤は英語もそれなりに上達していたが、生まれつきコミュニケーション能力が特に優れていたために、英語でも相手の言いたいことを正しく理解し、こちらの言いたいことをきちんと伝えるのが上手だったようだ。ともかく講和交渉はまとまったのだから、伊藤の通訳はそれなりに役だったのだろう。

慶応４年、新政府が誕生すると、伊藤はその英語力を見込まれて神戸港の外国事務関係の判事となり、神戸事件などの解決のために英国公使パークス等と精力的に交渉して解決を成し遂げた。伊藤の英語でのコミュニケーション力の高さを示した事案であった。また明治元年（1868 年）正月 15 日、新政府は神戸の運上所（税関）において、英米仏独伊蘭の６カ国の公使を集め、《天皇を君主とする新政府の成立》を宣言したが、その宣言は初代兵庫県知事となっていた伊藤が英語で行なった。

明治４年 11 月（1871 年）維新政府は岩倉具視を正使とし、大久保利通、木戸孝允、伊藤博文、山口尚芳を副使とする欧米 12 カ国視察団を派遣した。最初の訪問地は米国のサンフランシスコで、歓迎晩餐会で日本側を代表して通訳無しの英語スピーチをしたのは伊藤であった。他に英語でのスピーチができる人間が居なかったからだ。このときの伊藤のスピーチについて、地元のサンフランシスコクロニクル紙は紙面で「これは晩餐会のテーブルスピーチとして最高の見本となる」と称賛した。

英語力に関する伊藤の最後のエピソードは、明治 18 年（1885 年）初代の内閣総理大臣を決める際のものだ。候補者は二人に絞られた。一人は太政大臣の三条実美、あとの一人は伊藤博文だ。三条は京都の名門公家の出、伊藤はやり手で有能だが周防の貧しい農民の出。どちらを選ぶかなかなか決まらない中で、井上馨が「これからの総理は英語の外電を読めなくてはダメだ」と発言したところ、山縣有朋が「そうすると伊藤君より他にはいない」と発言して、伊藤博文が選ばれたという。

以下次号に続く。

****

「了解日本」(「日本を知る」（第２２回）　　俞彭年　（８６歳）

10. 外来文明の三部作

日本人は中国文明を受け入れる

日本人が最初に受け入れた外国文明は中国文明です。多くの日本人は、日本文化の母は中国文明であると言います。歴史考証によると、日本は秦・漢の時代に中国と交流があり、その際、中国から日本へ高度な生産技術や生産道具が伝わり、狩猟が中心だった縄文時代から農耕を主とする弥生時代への移行を促しました。

紀元前 220 年、徐福は 3,000 人の少年少女とさまざまな産業の職人を率いて、五穀の種を持って浙江省慈渓の達蓬山東から蓬莱へ渡りました。徐福の伝説は現在も日本各地に伝えられている。

徐福と関係があると自称する町は、日本に 22 あり、現在も「徐福研究会」の活動があり、佐賀市には徐福の銅像が建立されている。日本には徐福の墓が残っている場所がいくつかある（どちらが真実かはわかりません）。一部の人々はまだ徐福の子孫であると主張している。

1784 年、西日本の博多湾の志賀島で「漢委奴国王」と刻まれた金印が発見された。史書によると、漢の武帝が日本の使節に印を与えたと記載がある。日本の民族はどこから来たのかは、長年の学術的議論であり、まだ結論に達していない。

『日本文明の 77 の鍵』（梅棹忠夫編・文芸春秋出版）によると、現代日本人は縄文人系と弥生人系に分けられるという。旧石器時代から縄文時代にかけて南方から日本に渡ってきた人たちは縄文系人、弥生時代に北から日本に渡ってきた大陸人たちは弥生系人とされ、シミュレーション実験によると、弥生人の移住は奈良時代までの約 1000 年、その数は 200 万人である。

紀元 3 世紀から 5 世紀にかけて、中国の漢字が日本に伝わり、それ以来日本に文字の記載が始まった。最初は漢字の発音を利用して日本語の文を綴り、表音文字となった漢字を「万葉仮名」と呼んだ（「真假名」とも呼ばれ、「假」とは当て字の意味、「名」とは漢字の意味）。

9 世紀になると早く書くために省きはじめ、万葉仮名（漢字）の部首だけを書くようになって表音文字「カタカナ」が登場した。9 世紀末には万葉仮名（いわゆる漢字）の草書化された書体が登場し、定着していった。これが表音文字「ひらがな」である。その後、「万葉仮名」は次第に淘汰され、「カタカナ」と「ひらがな」が残り、表意文字の漢字と、表音文字の「カタカナ」、「ひらがな」が混在して使われる日本語表記形式

が出現した。このことから、日本語のアルファベット「仮名」は、漢字を装った表音文字で、漢字の部首を仮借して「カタカナ」、漢字の草書体を仮借して「ひらがな」と呼ばれるようになりました。

中国の南北朝時代は日本の大和時代で、多くの大陸移民が桑の種、養蚕、絹織物の技術や製鉄技術を持って日本に渡り、彼らは日本の現地人に「渡来人」と呼ばれました。

中国の隋唐時代は日本の大和、奈良、平安時代で、この時期から日本人は中国に渡って中国文明を学び、吸収し始めました。

遣随使（回数は定説がなく、日本側の『日本書紀』によると 3 回、中国側の『隋書』は 4 回）は大陸で中国の制度や文化を学びました。

遣唐使（回数は定説的ではないが、日本側の研究では 20 回、19 回、18 回、17 回、15 回、13 回の 6 つの説がある）と多くの留学僧、留学生が中国に来て、中日間の人的往来は盛況だった。

鑑真和上は第 9 次遣唐使の留学僧・栄叡と普照の 2 人の要請に応じて日本への渡航を決意し、始めの 4 回の渡航計画は、海に出ずに挫折し、5 回目の計画は海に出ることに成功した。しかし暴風雨に遭い海南島に漂着して渡航に失敗、6 回目の渡航で、10 回目の遣唐使の帰国船に乗って日本に渡ることが出来、同時に仏教の戒律、医薬、文化を持ち込んだ。

2004 年秋に西安郊外で日本人遣唐使留学生・井真成の墓誌が発見され、遣唐使研究ブームが巻き起こりました。

中国の宋時代（日本の平安時代）から両国間に大規模な貿易取引が実現、日本では時期によって「日宋貿易」、「日明貿易（朝貢貿易）」、「唐船貿易」と呼ばれ、それによって西日本の博多、堺、大坂、長崎などの都市が栄えました。

平家一門、足利一門、徳川幕府などの支配集団は、いずれも中国貿易を独占し、大きな利益を得て、その統治に強固な役割を果たしました。

日中間の貿易で日本が中国書籍を輸入することは重要な部分であり、中国の僧侶や文人が貿易船に乗って日本に渡行したことも多くありました。

日本の江戸時代（1603-1868）には中国文明も吸収されており、徳川幕府は朱熹学を官学として「朱子学」と呼び、直轄学校「昌平坂学問所」を開いて「朱子学」を教授し、各地の大名も「藩校」を開き「朱子学」を教えた。明と清時代、儒学者の朱之瑜（号舜水）は日本に亡命し、水戸藩主徳川光圀の尊礼を深く受け、20 年余り講義し、当時の日本思想界に一定の影響を与え、日本で没しました。

中国元王朝時代（日本の鎌倉時代）、フビライ・ハーンは元朝に貢納を強制するため、1274 年と 1281 年の 2 度にわたって日本に出兵、日本では「元寇襲来」（「モンゴル襲来」とも）と呼ぶ。元軍は 2 度とも台風に襲われたため征討はいずれも失敗に終わりました。日本はこの 2 度の台風を、日本を守る「神風」と呼んで今も語り継いでいる。

中国明朝時代（日本の室町、安土桃山時代）の中日両国の海賊は「倭寇」を結成して嫌がらせをし、中国東南沿岸を略奪した。日本平戸市には倭寇の海賊のリーダー安徽人の王直の全身銅像と遺跡がある。

****

アメリカ人による日本昭和史（1）　　津田孚人（86歳）

世界は米中二大国時代を迎え、21世紀初頭までの世界協調路線が崩れ、”力による支配”の時代に戻りました。「台湾有事」などを、メディアは最近盛んに取り上げていますが、いずれにしても日本の立ち位置、特に日米、日中関係などを、国民全体で考える時期にきていることは確かです。

学生時代、”安保反対”デモに参加しましたが、実際は何も知らずに参加していました。日本の歴史教育では、明治、大正、昭和の近現代史をほとんど教えません。社会に出てその必要性を痛感しました。

退職後、歴史、特に日本史を学び直したいと考えているときに、早稲田大学のオープンカレッジを知りました。関連する講座を積極的に受講し、その中で、最澄の弟子、円仁の「入唐求法巡礼行記」を知り、元駐日大使であったエドウイン・O・ライシャワーが日本史、東洋史の研究者の第一人者であることを知りました。特にその著書、「円仁―唐代中国への旅」には大変感銘を受けました。

ライシャワー博士は、「入唐求法巡礼行記・円仁著・深谷恵一訳・中公文庫（1990年）」の中で訳者と対談、次のように語っています。

「私は日本の人々は、円仁という人物の重要性を見逃していると思う。なぜ日本人は世界史の中の日本というものをもっと考えないのだろうか。日本の歴史そのものが人類の一つの歴史という重要性を持っている。

日本の歴史は日本が島国であるから孤立化の立場にあったが、日本人自身としてはそういう面を何とか取り除こうという努力をしている。特に7世紀から9世紀にかけては、中国を知るという努力が非常に積極的に行われている。」

さらに、「円仁―唐代中国への旅・田村完誓訳・講談社学術文庫、1999年」の中で、「旅行家としてのマルコポーロの名声は世界中にとどろいているが、慈覚大師円仁の名前は彼の故国日本でさえも、わずかに学者に知られているに過ぎない。」と嘆かれています。

幸いなことに早稲田の講座のメンバーで、円仁が使命を持って遣唐使に同行して中国にわたり、長期間足止めされた「五台山」を、実際に訪ねるという企画があり、喜んで参加しました。五台山へ向かう途中の山中でチャーターしたバスが故障し、二月の寒い暗夜、下界の明かりは見えず、ただ天上の月と星明かりのみ、という状況に置かれたとき、「阿倍仲麻呂と同じ」と言う声がありましたが、歴史と重なるような体験は大変貴重でした。世界遺産となる歴史的な聖地訪問、いま尚当時の様子が目に浮かびます。（なお早稲田では、別グループでしたがノモンハン事件の現地を訪ね、さらにハルビンで731部隊の跡地を訪ねる旅行をしました。歴史への理解が一段と進みました）

先日近くの古本市で「ライシャワーの昭和史・ジョージ・R・パッカード著・森山直美訳、講談社・2009年出版」という本を見つけ、『円仁―ライシャワー』に強い思い入れがありますから直ぐに購入しました。2009年の出版なので、リーマンショックの最中なので気が付かなかったのか、あるいは奈良、平安に夢中になっていた時期なので気が付かなかったのか、不思議に思っています。

現代史に関心を持つ現在、読んで見ると初めて知ることが多く、一段と興味が湧きましたが、これまで日本史は、日本人が書いたものを読み、学ぶものと、安易に考えていましたので、外国人による日本史は新鮮で、大いに考えさせられました。

歴史の逆襲が始まった現在なので、この「ライシャワーの昭和史」により、昭和の日米関係を振り返ってみることにします。

父、聖職者オーガスト・カール・ライシャワー夫妻が東京へ着いたのは１９０５年（明治３８年）、エドウイン・Ｏ・ライシャワーが誕生したのは１９１０年（明治４３年）でした。しかし、父オーガストが日本で宣教を始めた１９０５年は、日米関係悪化の節目の年でした。

１９０５年のポーツマス条約は、セオドア・ルーズベルト大統領が仲介し、戦争で正当的に獲得したものを日本から騙しとるかたちの和解案であったので、日本国民の中に広く憤りは強かった。暴動が日比谷公園などで起き、怒れる日本人からアメリカ人を護るために、明治学院の構内に日本の軍隊が配置されるほどだった。

アメリカでは１９０５年まで、日本人は友好的で従順な弟たちで、われわれ自身の「より優れた」文明を学びたいという意欲と熱意をもった新しい国家とみなしていたので、宗教、実業、軍部の指導者たちは日本の国力上昇を擁護していた。

しかし中国とロシアに対する軍事的な勝利によって勢いを増した日本のナショナリズムが、アメリカに向かい始めると様子が変わって行った。

ライシャワーが誕生した１９１０年（明治４３年）、日本は韓国を併合し、満州征服へ向けて長い戦争を始めた。アメリカの帝国は、１８９９年、ハワイとフィリピン諸島まで広がり、日本の植民地であった台湾に危険なほどまで近づいていた。

カリフォルニアでは、反日感情が高まっていた。日本からの移民が殺到し、アジア人移住者に門戸を閉ざせ、という声を生んだ。１９０５年、サンフランシスコ市は、日本人学童を公立学校から締め出す隔離命令を出した。レイシズム（人種差別主義）がさく裂した。

『サンフランシスコ・クロニクル』紙は、「もし日本人移民が抑制されなければ、我が国の地方人口は日本人になり、地方文化は日本文化になり、白人人口が都市や町で追いつめられるのは時間の問題」と不気味な警告を発した。

この危機は、１９０８年、日本が国外への市民流出にブレーキをかけることを約束した「紳士協定」によって一時的に回避された。

１９０５年当時、米海軍の一大尉は、「（日本人は）・・・親切で、寛大で、心が広く、礼儀正しく、これ以上望めないほど忠実で、正直な国民である」と書いていたが、このイメージは１９１４年にはほとんど消えていた。

対照的に中国に対しては、「腐敗した役人と脆弱な中央政府が統治する、後れた、停滞した国民」と見られていたのが、日本が東アジアにおける米国の権益を脅かしそうになると一変した。

１９１１年の孫文革命（辛亥革命）は、アメリカ人の頭に中国の新しいイメージをかすり傷のように残した。その後３０年間、アメリカの宣教師、ビジネスマン、傭兵、ジャーナリストたちが、ともに新しい中国像を生み出すのに寄与した。

それは、新進の民主主義国家、儲かる市場、西洋びいき、キリスト教に成りえる

国、さらには略奪的な日本人の餌食、というイメージだった。
　中国にいたアメリカ人宣教師たちは、本国の信徒団に突拍子もないほど楽観的な報告を送っていた。眼をおおうばかりの都会の貧困や、官吏の汚職、売春や犯罪には一切触れずに「キリスト教の収穫を待つ、空前のレベルまで成長した畑」と書く報告書もあり、アメリカの読者は大満足だった。
　日本の拡張という脅威がアメリカを警戒させたとしたら、その逆もまた真だった。セオドア・ルーズベルト大統領は、「アメリカは太平洋を支配しければならない」と宣言した。東京から見ると、アメリカの野心は不気味だった。

　１９０９年、ホーマー・リーというアメリカ人軍属が、「無知がもたらす勇気」というセンセーショナルな本を出し、太平洋の覇権をめぐる日米戦争の到来を予告した。リーは、日本には、フィリピン、アラスカ、ハワイ、をアメリカから奪い、アメリカ西海岸を侵略してワシントン、オレゴン、カリフォルニアを容易に占領できる陸海の戦力をもっていると訴えた。この本は、カリフォルニアの白人植民者にヒステリー症状を起こさせ、州議会による日系移民の土地所有の禁止、連邦議会による移民法の成立（１９２４年）と進んでいった。エドウィン・ライシャワーは、１３歳の時、この移民法通過に怒りを覚えたと回顧している。

　エドウィン・ライシャワーの父、Ａ・Ｋ・ライシャワーは、１９０５年に来日したが、そのとき２６歳であった。日本の文化、歴史、宗教、政治にたいする知識は、ほとんどなかった。日本語はほとんどしゃべらなかった。しかし、着任してから８年間の知的成長とエネルギーは驚異的だった。ただちに日本語の勉強をはじめ、最初の２年間、教科書も、適切な指導もないまま、独力でその習得に専念した。
　そして、異教徒の魂を救いたいと情熱に燃えて東京に来た若いクリスチャンは、神道、仏教、儒教に強く惹かれるようになった。最初は、それら既存の宗教と、異教徒にキリスト教を伝授するための足掛かりを見付けようとした。その後は、イエス・キリストへの信仰を堅持しつつも、布教者の立ち位置から、日本の文化と宗教を教えることに熱心な知識人へと徐々に変わって行った。
　８年たち、日本をキリスト教に改宗させるのは容易でないことを、はっきりと気付かされたが、Ａ・Ｋ・ライシャワーは、キリスト教が普及していく見通しについては依然として楽観的だった。
　宗教を超えて踏み込んだ発言もしている。「日本人は、土着の神道の基本原理に忠実であるという点で愛国者であり、その次に宗教人である、ことを忘れてはならない。両者がぶつかると、宗教の方が負けがちである。今日にいたるまで、これが平均的な日本人の特徴のように思われる。宗教を擁護するものは、宗教は国家の安寧のために役立つという言い方をする。キリスト教が日本で直面した最大の障害は、国家の土台をむしばむものだという敵側の言い分である」
　「初期の日本史観」は、のちに息子たちの著作を特徴づける洞察に満ちていた。たとえば、６世紀の日本人は、「生活の仕方は極めて簡素だったが、知的な才能を持っていた。また、並外れた審美的な能力に恵まれていることがわかった」。古代の日本人には「異国の信念を、妥協と吸収によって乗り越える傾向」がみられた。仏教を日本に伝えた９世紀の日本の学僧たちについて、「新しいものを素早く採り入れるのだが、採り入れる前にわずかばかり手を加え、別のところで生まれたものを混ぜるという日本人の根深い特性」に目をとめた。
　さらに「日本はなによりも『神々の国』であり、日本人は『天子』の子孫であるから、

日本人が生とこの世のものを善とみなすのはより自然なことである。」。（つづく）

****

講演会のご案内

****

●新三木会　第１４９回　講演会

日時　２０２４年　７月１８日（木）13：00～
演題　『日本明治期・近代化の群像』
講師　泉　三郎　氏　（一橋大学経済学部 34 年卒　作家
・ＮＰＯ法人「米欧亜回覧の会」前理事長　）

昨年末、永年御研鑽の米欧亜回覧の会理事長を辞任された泉氏は、長きにわたり明治期岩倉使節団の果たした幾多の日本近代化の業績を、多くの会員同志と追跡され、共に、世に問うてこられた。今回その総決算として、泉氏の胸に響き残る英傑への思いを語っていただく。

申込　https://forms.gle/wXc3pTEPdy4vuetj6　（または新三木会へ mail）
会費：・会場出席（受付払い）２千円、夫人千円、学生無料
・通信受講（振込）千円

銀行振込：三菱東京 UFJ 銀行 / 船橋支店
普通預金 0132853 新三木会（シンサンモクカイ）

****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
住所：〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１
ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１